# 算命学中庸

## 【初年】７回目

７回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖十干の成立〗



４回目〖三つの礎〗その(3)陰陽論を思い出していただきたいのです。

陰陽論 ⇒ 全てのものに陰と陽がある

↓

五行にも陰と陽がある

↓

木性にも、陽の木性・陰の木性がある

「物事のすべては、陰と陽で成り立っている」ということですから、五行にも陰と陽があるという考え方になるはずです。

〔たとえば〕今まで、五行で木性（もくせい）とか、火性（かせい）とか、水性（すいせい）とか、いってきましたが、それらにも、陽（よう）の木性（もくせい）、そして、陰（いん）の木性（もくせい）があります。

宿命（１）五行

| 木 | 火 | 土 | 金 | 水 |
|---|---|---|---|---|
| ＋ － | ＋ － | ＋ － | ＋ － | ＋ － |
| 甲（こう） 乙（おつ） | 丙（へい） 丁（てい） | 戊（ぼ） 己（き） | 庚（こう） 辛（しん） | 壬（じん） 癸（き） |

宿命（１）五行 のように、陽の木性を「甲（こう）」として……

陰の木性を「乙（おつ）」として……

それぞれの五行に「十干（じっかん）」の記号をつけたのです。

十干（じっかん） ⇒ 甲（こう） 乙（おつ） 丙（へい） 丁（てい） 戊（ぼ） 己（き） 庚（こう） 辛（しん） 壬（じん） 癸（き）

木性には（陽の木性）と（陰の木性）があります。

火性にも（陽の火性）と（陰の火性）があります。

土性にも（陽の土性）と（陰の土性）があります。

金性にも（陽の金性）と（陰の金性）があります。
水性にも（陽の水性）と（陰の水性）があります。
このことは、前回やりました「気」のことを意味しているのです。
それを表現する場合に――こちらは（陽の木性）です。
あちらは（陰の木性）です。という言い方は面倒です。
また言いづらいので、五行に記号として「十干（じっかん）」を付けたのです。

✏ 陽の木性を「甲（こう）」として、陰の木性を「乙（おつ）」としました。
陽の火性を「丙（へい）」として、陰の火性のほうを「丁（てい）」としまして、甲（こう） 乙（おつ） 丙（へい） 丁（てい） 戊（ぼ） 己（き） 庚（こう） 辛（しん） 壬（じん） 癸（き） と記号をつけたわけです。

「戊」は陽の土性、「己」は陰の土性
「庚」は陽の金性、「辛」は陰の金性
「壬」は陽の水性、「癸」は陰の水性

これらが十干（じっかん）です。　「十干」は記号です。

十干に大きく読(よ)み仮名(がな)をつけて書きました。

| 甲 | 乙 | 丙 | 丁 | 戊 | 己 | 庚 | 辛 | 壬 | 癸 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| こう | おつ | へい | てい | ぼ | き | こう | しん | じん | き |

**この１０個の記号は「十干 じっかん」と呼ばれています。**

「十干」の３文字「甲」「戊」「己」
（十二支）の３文字（申）（戊）（巳）
**とても似ています**

似(に)ていますが、意味は全く違います。間違わないでください。

甲（こう）と 申（さる）　戊（ぼ）と 戌（いぬ）　己（き）と 巳（み）

**十二支は ⇒ 子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥**

戦前までの通信簿には、甲・乙・丙・丁がつかわれていましたので、甲乙丙丁までは知っている方は多いのですが、もともと、これは〔甲乙丙丁戊己庚辛壬癸〕と、１０個ありまして、十干(じっかん)と呼ばれていたのです。

ここまでやった勉強のなかで、今の段階で覚えておいて頂きたいのは、十干（じっかん）と十二支（じゅうにし）です。

前回の勉強でやりました（十二支）と、今回の「十干」は、読めて、書けるように覚えて頂きたいのです。
十干と十二支は、皆様が占いとするうえで必須（ひっす）です。

✎（十二支）は、皆様ご存知ですが下記します。

子（ね） 丑（うし） 寅（とら） 卯（う） 辰（たつ） 巳（み） 午（うま） 未（ひつじ） 申（さる） 酉（とり） 戌（いぬ） 亥（い）

十二支は（支）が１２個あるので、十二支と呼んでいます。

✎ **十干をおぼえるときに、覚え方のコツがあります。**

甲（こう） 乙（おつ） 丙（へい） 丁（てい） 戊（ぼ） 己（き） 庚（こう） 辛（しん） 壬（じん） 癸（き） と、この順番で読んで覚えても構いませんが、甲（こう） 乙（おつ） 丙（へい） 丁（てい） 戊（ぼ） 己（き） 庚（こう） …… と、ただ流して読むよりも、「甲」と「乙」はどちらも五行は木性ですから、木性の〔木もく〕という字をくっ付けまして、「甲木 こうぼく」「乙木 おつぼく」というように、あらかじめ五行の〔木火土金水〕の質を、十干にくっ付けて呼ぶことのほうが、ダントツに多いです。

そこで ➡

♪ 木火土金水をつけて、実際に<u>声に出して練習</u>してください。

| 陽干 | 陰干 |
| --- | --- |
| 「甲木 こうぼく」 | 「乙木 おつぼく」 |
| 「丙火 へいか」 | 「丁火 ていか」 |
| 「戊土 ぼど」 | 「己土 きど」 |
| 「庚金 こうきん」 | 「辛金 しんきん」 |
| 「壬水 じんすい」 | 「癸水 きすい」 |

上記の呼び方で覚えて頂きたいのです。

具体的に〔たとえば〕「甲」と「乙」でしたら、「甲」という１文字であっても「こうぼく」と読むようにします。

「乙」という１文字であっても「おつぼく」と読むようにして、覚えて頂きたいのです。

丙(へい)も「へいか」として、最初から（木火土金水）の五行をくっ付けて覚えておきますと、後々(あとあと)、占いとするときにとても便利です。

なぜかと言えば、ただ単に「丙 へい」と覚えても、それが五行の何――？？？ということになるわけです。

「丙」が水性なのか、火性なのか、土性なのかをすぐに判断できないと、占うときに、手間取ってしまいます。

「丙(へい)」は火性(かせい)です。(ひせい) ではなくて (かせい) です。

最初から「こうぼく」「おつぼく」「へいか」「ていか」「ぼど」
「きど」「こうきん」「しんきん」「じんすい」「きすい」
というようにしてください。
（木火土金水）の五行をくっ付けて覚えておけば、とても便利です。
最初からこの読み方で覚えるようになさってください。

☞ 生年月日を宿命になおして、実際に宿命を出す方法がもうすぐ勉強に出てきますので、なるべく早く覚えて頂きたいのです。

**十干に（木性）（火性）（土性）（金性）（水性）の五行を付けた呼び方。**

| 甲 | 乙 | 丙 | 丁 | 戊 |
|---|---|---|---|---|
| こうぼく | おつぼく | へいか | ていか | ぼど |
| 己 | 庚 | 辛 | 壬 | 癸 |
| きど | こうきん | しんきん | じんすい | きすい |

**「甲」一(ひと)文字でも〔こうぼく〕といい、「壬」一(ひと)文字でも〔じんすい〕といいます。「庚」一(ひと)文字でも「こうきん」といいますよ。**

✏ 十干と十二支は、占うときに頻繁（ひんぱん）につかいます。
読み方も順番どおりに覚えていただきたいのです。

**十干は ⇒「甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸」の順番です。**

**十二支は ⇒（子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥）の順番です。**

※ 最初に間ちがって覚えてしまって、後々になっても、間違えてしまう生徒さんも時々いらっしゃいますので、注意を払って覚えてください。

✒ 十干と十二支を書くときには、6文字 が間違いやすいので、気をつけて覚えてください。
それは、十干の「己 き」と 十二支の（巳 み）です。
十干の「己 き」は、おのれという字で、上部が開いています。
十二支の（巳 み）は、上部が完全にふさがっていますので気をつけてください。
そして、十干の「戊」と、十二支の（戌）です。
十干の「戊」と、十二支の（戌）です。
これは、点があるかないかだけです。
中に点が入っていれば、十二支の（戌 いぬ）です。
中に点がなければ、十干の「戊 ぼ」です。
この２字はとても似ていますけど、意味はまったく違います。

☞ 間違いが多いのが、十干の「甲こう」と十二支の（申さる）です。上が出ているのと、出ていないとの違いで、「甲こう」は出ていません。（申さる）は出ていて、｛何々申(もう)しあげます｝の（申もう）という文字です。

甲　巳　戌
申　己　戌

宿命を書くときに巳己と書いた。
この書き方は間違いです。

甲　己　戌
申　巳　戌

正しい

自分でも、どっちがどっちだか、判らなくなったりすることがありますので、最初に気をつけて覚えるようにしてください。

十干のなかには「甲 こう」と「庚 こう」、「己 き」と「癸 き」と言うおなじ読み方があります。
このときに〔木火土金水〕を間違えてくっ付けて覚えてしまうことがあるのです。そのことも気をつけてください。
〔たとえば〕「甲木 こうぼく」のところを、「庚金 こうきん」の「金 きん」をくっつけて書いても「甲金 こうきん」という

呼び方はおなじです。

このように間ちがえて覚えてしまうと、「甲　こう」は木性なのに、金性と記憶してしまうと、占いの答えが違ってきます。

この部分も気をつけて覚えてください。

十干（じっかん）の「己土　きど」は、五行の土性なのですが、それに水性をくっつけて「己水　きすい」と、覚えてしまうこともあります。

それは十干「癸水　きすい」と呼び方は一緒ですが、この「己　き」を水性と覚えてしまうと、占ったときにその答えが違ってしまいます。

この部分もキチンと覚えていただきたいのです。

✏ **十干の話しに戻ります。**

自然界のなかにおける十干の「甲」は「陽の木性」で、「乙」は「陰の木性」です。

陽の木性のほうが、主体性ある木性なわけです。

**【初年】２回目〖三つの礎〗(3)陰陽論** で勉強しましたように、陰と陽では、陽のほうに主体性があり、陰のほうは主体性が無いわけです。

**甲 ⊕ 主体性がある**
**乙 ⊖ 主体性がない**
**このようになります**

陽の木性は「甲木」で主体性がある木性です。

おなじ木性でも「乙木」は陰の木性なので、主体性がない木性です。こういう意味があるわけです。

このことを具体的に自然界に当てはめて考えますと――おなじ木性であっても、「甲木」は主体性がある木性ですから、大きく強そうな木性ということで、「甲」を樹木というように、ものにたとえて考えるわけです。

「乙木」はおなじ木性ですが、陰の木性なので、主体性

がない木性ですから、樹木よりも小さくて、弱い木性ということで、草(くさ)とか穀物(こくもつ)にたとえます。
実際の占いでも、「甲」を樹木にたとえて、「乙」は草にたとえて、占っていくことが多いです。
「甲」一文字で「こうぼく」といいます。
「乙」一文字で「おつぼく」といいます。

十干はこのようにして「自然界の物質にたとえて考えることのほうが多い」と思っておいてください。
そして、だんだんと具体的な占いの観方になって行(ゆ)きますが、そうなると勉強がおもしろいと思います。
いままで勉強してきました基本的な考え方の「陰陽」とか、「五行」の考え方は占うときに、あとあとまで大事なものとなります。
ぜひともご理解なさってください。

**【初年】７回目〖十干の成立〗** 終わります

**つぎの授業 ⇒【初年】８回目「十二支と陰陽論(おんようろん)」**